

総合数理ゼミナール レポートについて

桂田 祐史

2019年7月12日

総合数理ゼミナールの締めくくりとして、自分が発表したことをレポートにまとめて提出する。

- (なるべく) 授業最終日 (7月19日) までに80%程度完成させ、桂田に見せて、修正・改善意見をもらうこと— と言ってあるが…みなさん進行状況はどうですか。
- 提出締め切りは8月2日(金曜)19:00. 提出は原則として Oh-o! Meiji で行う。レポート自体のフォーマットはPDFにすること。プログラムなど複数のファイルを提出する場合は、1つのzipファイルにまとめて提出する。
- 配布した石黒 [1] に一度目を通すこと。機会があれば定評のある木下 [2] にも目を通すと良い(無理は言いません)。
- 想定する読者として、特に理由がなければ、一般的な現象数理学科の学生程度の知識を持った人(少し前の自分等)とする(「実際に読むのは先生だから、いい加減に書いても分かるはずだ」などと考えないこと)。
- 一般常識でない言葉の定義はレポート中に書くこと。
- 基本的には、(表や図は除き)全体が声に出して読める(そしてそれを聞いた人が分かる)文章になっているように書く。
スライドや板書とは違う。
- 電子的に作成すること(手書きは認めない)。数式が多い場合は、 $\text{T}_\text{E}_\text{X}$ を使うことを推奨する(その方が楽だと思う…)。 $\text{T}_\text{E}_\text{X}$ を使う場合は、時間の許す限り、 $\text{T}_\text{E}_\text{X}$ の使い方の相談に乗る。プログラムや図の載せ方などは、桂田 [3] に説明してある。 $\text{T}_\text{E}_\text{X}$ でないソフト(Wordとか)を使っても構わないが、その場合は、ソフトの使い方は自分で習得して下さい。
- タイトル、氏名(いわゆる所属代わりに学年・組・番号)、提出年月日、は必須。
- 序論(「イントロ」, 「はじめに」, 「序」など)、本論、結論(「まとめ」, 「結論」)という3つの節は最低限必要である。本論が長ければ、その内容により複数の節に分けること。序論と結論のバランスはケース・バイ・ケース(数学の論文の場合、序論の中に結論をほとんど書いてしまう場合が多く、その場合は結論は短くなる)。
- 自分が実際に参考にした文献や資料は、参考文献表に載せること。数学的な議論は、他の文献・資料によらずに self-contained な説明を書くことも可能であるが、歴史的事実などは不可能であり、信頼できる情報を引用することは必須のはずである。
 - 書籍の場合、著者名、タイトル、出版社、出版年の4つは必須。

- 雑誌記事の場合、著者名、タイトル、雑誌名、巻号、出版年、ページ。
- WWW ページの場合も、分かるならば著者名、URL など (アクセスした日時を書くことも検討すること)。

図、表、画像などを引用する場合も出典を明記すること。読者が確認のために文献・資料をチェックするには、それらを特定するための条件が必要であり、それを載せることが基本である。

- 「準備」や「付録」もありうる。
 - 例えば数学の定理で、テーマそのものではないが、テーマを論じるのに必要で、今回学んだこと等を、準備の節にまとめておく。
 - 例えばコンピューターのプログラムを使って結果を得た場合に、結果を再現するために十分な情報 (プログラム、入力データ等) を付録に掲載する。
(研究論文などでは、その手の情報は、他人と競争で有利を保つために、しばらく非公開にする、ということはあるが、今回はそうなるとは考えにくいので、きちんと書くことを推奨する。)
- ある程度長ければ目次をつける。T_EX では、`\tableofcontents` で自動的に目次が生成される。短い論文などでは、イントロの最後に目次に相当するものが書かれることもある。
- (繰り返し) 提出日の前に桂田に原稿を見せて、指示にしたがって修正を行った上で提出する。

参考文献

- [1] 石黒 圭, この1冊できちんと書ける! 論文・レポートの基本, 日本実業出版社 (2012).
- [2] 木下 是雄, 理科系の作文技術, 中央公論新社 (1981).
- [3] 桂田祐史, T_EX 入門 2019, <http://nalab.mind.meiji.ac.jp/~mk/lab/text/tex2019/> で読める。